

木下昌輝／咲くやこの花インタビューvol.3

木下昌輝(きのした・まさき)【平成27年度 文芸・その他部門[作家]】



2016年11月19日(土)大阪中央図書館にて、咲くやこの花コレクション『木下昌輝 講演会』を開催します。作家の木下昌輝さんは大阪生まれ、奈良育ち。2012年「宇喜多の捨て嫁」でオール讀物新人賞受賞。2014年受賞作に書き下ろし5篇を加えて上梓した、単行本デビュー作『宇喜多の捨て嫁』がいきなり直木賞候補となり、注目を集めました。帯には「面白いという点では候補作中随一だった」という東野圭吾、高村薫らの激賞コメントが並び、受賞こそ逃したものの歴史エンターテインメントの新たな担い手として期待の存在です。「何でも答えますよ～」と、あいにくの空模様を晴らすような笑顔で登場した木下さん。明るく柔らかな物腰に甘え、デビューまでのリアルな道筋をじっくり伺いました。

◎取材・文・撮影＝石橋法子

「通っていた専門学校で、直木賞候補の電話を受けました」(木下)

デビュー作『宇喜多の捨て嫁』は、高校生直木賞、歴史時代作家クラブ賞新人賞の連続受賞に加え、直木賞候補でも沸かせましたね。



僕はフリーライターをしながら、大阪文学学校というところで勉強させてもらってたんですけど。そのチューター(講師)が「君は、同校初の直木賞受賞者になれる」と買ってくれていて。直木賞獲るつもりで1年頑張った、そこでアカンかったらライターをやめて就職しようと思っていたので、候補に選ばれたときは嬉しかったですね。ちょっとでもチューターに恩返しできたのかなと。結局、直木賞は同じ学校に通われていた朝井まかてさんが、僕より先に獲られました(笑)。

直木賞候補の知らせは、どんなシチュエーションでお聞きになったのですか。

就職目指して専門学校で、必死にイラストレーター(パソコンの編集ソフト)講座を受けているときでした。電話で「直木賞の候補になりました」と聞いて、「えー！」って。『宇喜多の捨て嫁』が出た当初は、まだ小説家では食えないと思っていたので、就職のために専門学校に通ってました。ライターだったので、イラストレーターでラフまで仕上げられたら、出版系の就職に有利かなと(笑)。

(笑)。すごくよく分かります。

でも候補に選ばれてから、急に仕事が増え出して、これは食うていけるなと。そこから専門学校の方に相談したら、「そういうことなら、がんばってください」ところよく送り出してくれました。

専門学校始まって以来のエピソードだったでしょうね。もともと絵や文章を書くのがお好きで、小説家を目指されたのは高校生の頃だったとか。

当時はバレーボール部だったんですけど、僕は補欠で全然居場所がなかった。そんな時、みんなで交換日記をすることになって。そこで僕が書いた文章を、みんなが面白いと言ってくれるのが嬉しくて。「文章で人を楽しませる仕事に就こう」と思った最初ですね。

ちなみに、男子も交換日記とかされてたんですね。

いや、すごく珍しくて。当時のキャプテンがメンバーの団結力を高めるために提案してくれました。絶対に先生には見せないの、悩みやグチ、何を書いてもいいよと。僕は実家が町工場だったので、「家は継ぎたくない。じつは借金があるらしい…」とか、ありのままを書いてましたね。



その後、大学は理系の建築学科に進まれたんですね。

バレー部の友達に小説家になりたいという話をしたら、それなら引き出しを増やせと。引き出しが少ないと、「エロ小説しか書けなくなるらしいで」と助言されて。本当は文学部に行きたかったんですけど、じゃあ全然違う理系に行こうと。

急展開ですね！

ただ、もともと数学は得意だったので、高校の文理選択からずっと理系でした。中でも、建築学科はアートの要素もあって文系に近いと言われているので、役に立つかなと。

あくまでも、小説家になるための選択だったのですね。大学卒業後は、住宅メーカーに就職されました。平行して小説は書かれていたのですか？

いや、まったく書いてなかったと思いますね。文章を書くことは好きだったんですけど、大学を卒業する時点で、まだ自分には小説が書けないことが分かっていたので。とりあえず引き出しを増やすために就職をして。5年ぐらい経ったときに「このままやったら、会社の中から出られへん！」と思って。まずはライターになろうと、会社を辞めて学校にも行ったんですよ。

ライターのための学校があるんですね。

そこは高齢で引退したライターの方が講師をやっているような少人数の学校でした。ある日、知り合いの小説家が来て、小説の書き方を教えてくれたんですよ。僕は勝手に「レシピ」と呼んでいるんですが、自分のなかで大きな進歩があつて。言われたら確かに、ハリウッド映画などエンターテインメントの8割ぐらいは、このレシピで説明ができるなと納得して。そこから、小説を書くきっかけが見つかりました。

フリーライターとして生計を立てつつ、同時に小説、漫画、アニメなど多彩な読書歴が創作のアイデアを育む礎になったとか。



もともと漫画が好きで、小学 5、6 年生のときは担任の先生が教室に揃えてくれた横山光輝さんの『三国志』をよく読んでいました。中学生で宮崎駿さんを知ってからは、アニメーターになりたいと思った時期もありましたね。チャンバラとかも好きで、高校生ぐらいになると司馬遼太郎さんの歴史小説を読み初めるんですが。読書から創作に舵をきるきっかけは、東村アキコさんの漫画『ひまわりっ』でした。そこに『三国志』好きの腐女子が出版社デビューする話があって。その子は、三国志を「三国志学園」という設定で書いていた。それを見たときに、なるほどなと。商業出版は切り口が大事なんだなと。それがライターをしていた 34、5 歳のころ。僕も『三国志』が好きだったので、教わったレシピに切り口を加えて、書いたらどうなるのかなと考えて。日本の歴史も好きだったので、織田信長が三国志の世界にタイムスリップするという設定で書きました。

ユニークなアイデアですね。

そこで初めて小説が書けたんですよ。レシピの使い方が分かって、「あ、書けた！」と。すると非常にタイミングよく、ライターとしても食べられなくなって(笑)。これは小説家を目指そうと。

そこから大阪文学学校で学び、一念発起で直木賞を目指された、あの冒頭の話につながるんですね。改めて、デビューまでの道のりは正解でしたか？

正解だったと思います。先日も高校生直木賞のイベントで同じような質問に答えてきました。「文学部なんて、行っても役に立たないですよ」と、司会者が文学部の先生であることも忘れて(笑)。役立たないことはないですけど、寄り道をして、自分の視野を広げた方がいい。だって、(小説家を目指すのに)学歴が関係

ないことは、賞を獲られた数々の作家さんが証明されていますから。もし作家を目指すなら、僕と同じ道を辿ればいいと思いますよ(笑)。

「史実より嘘が定説になる、講談みたいな小説を書きたい」(木下)

『宇喜多の捨て嫁』では、登場人物らが刀剣を握る感触など、細かな描写がリアルでした。

あれは嘘でもあり本当でもあるんですけど、宮本武蔵が小指の使い方が肝だと話していて。全然関係ないんですが、僕が行ってるスポーツジムにイチロー選手などが取り入れている、初動負荷理論を学んだトレーナーがいて。その人が言うには、上手い人は小指にしか豆ができないと。他の指に豆が出る人は未熟の証とも言っていて。宮本武蔵と同じこと言ってるなと(笑)。



木下さんご自身も、古武道の経験があるそうですね。

ライターをはじめた頃、住んでいた京都で出会いました。400年前の戦国時代から続く備中伝竹内流という古武道で、館長が奥義の話をしてくれて。それは、自分よりも強い道場破りが来たときの技だと。まず最初に謝って、風呂に入れて接待をして、丸腰になったときに殺せと。卑怯な技なんですよ。他にも、横並びで二人で歩いてるときに、急に一方から襲われたときの対処法とか、裏切られたことを想定した型が多くて。要はそれが、下克上なのかなと。武士道と聞くとカッコいいけど、本当の下克上の時代はそうじゃなかった。それは自分で経験してみて分かったこと。同時に、そういう世界は司馬遼太郎も書いていないなと。

僕ならオンリーワンの小説が書けるんじゃないかなという気がして。竹内流を創始した竹内久盛のことを調べたら、宇喜多直家に滅ぼされた人だったんです。

それがデビュー作のアイデアにつながっていくんですね。続く2作目『人魚ノ肉』は、幕末志士と人魚伝説の組み合わせが新鮮でした。

母親が高知県出身なので、学生の頃に司馬遼太郎さんの『竜馬がゆく』を読まされてね。その後、司馬文学にめっちゃハマって読み漁ってたら、ある日『新選組血風録』を読んだときに、おかんにめっちゃ怒られました。「新選組は土佐藩を弾圧した人たちやで。そんな歴史を後退させた人たちの小説を読むなんて信じられへん」と。おかんは司馬遼太郎ではなく『竜馬がいく』(坂本竜馬)をすすめていたのかと、その時気づきました(笑)。

郷土愛を感じるエピソードですね。



だから、母親は『人魚ノ肉』は読めなかったと言っていましたね。坂本竜馬が人魚の肉を食べる話なので。ただ、高知弁は間違っているとの指摘はありました。まだ本になる前の原稿を勝手に読んでいたらしく、原稿の上に置き手紙がありました。他にも「竜馬と中岡慎太郎が子供の頃に対面していますが、そんな事実はないのでちゃんと訂正してください」とか。高知県人だけに、非常に厳しいダメ出しがたくさん書かれてました。

そういう、創作における史実とフィクションの取り扱い方については、どのようにお考えですか？

僕は講談みたいな小説を書きたいなと思っていて。張り扇でバンバン台を叩いて聴衆を集めて、そこで見てきたように面白い話をする。そういうことを小説でやりたいので。こんなこと言ったら怒られるかもしれない

いですけど、史実は重要視していない。歴史小説を書いてるつもりもあまりないので。もちろん扱うからには色んな資料をあたって、辻褄を合わせるのも必死にやってますけど。

講談というのは、あまり木下さんの世代では身近に感じる人も少ないのでは。

そうですね。多分、僕の中には宮本武蔵のイメージがあってね。宮本武蔵って何十人もの弟子を引き連れて旅をしていたことは、あらゆる資料で分かっているんです。でも、小説家はみんな宮本武蔵に一人旅をさせるんですよ。それは作家の立場になってみて分かるんですが、やっぱり大勢を引き連れた宮本武蔵がひとりの武芸者と戦っても、誰も燃えないじゃないですか。単なる弱いものいじめやから。一人旅というのは、それはそれで正解なんですよ。で、そんな正解を作ってきたのが、講談とかの世界なんです。史実をねじ曲げたことが、やがて創作のセオリーになる。それって、すごいことやなと。僕もそういう嘘をつきたい。ラーメンのダブルスープじゃないですけど、史実も嘘もどっちも濃くしたいというのはありますね。

実際『人魚ノ肉』では、どこまでが史実でどこまでが嘘なのか、調べるのが楽しいという読者の声もあるようです。

結構、本当のことばかり書いてるんですよ。例えば、作中に出てくる「京都の北山の口寄せの巫女」は実際にいて、新選組は揃いの羽織を着ていなかった。それなら、史実通りに書こうと。そうすることで、逆に嘘も引き立って、面白いことが書けるんじゃないかなと。

「単純な勝者は書かない。」誇り高い負け組”が共通点」(木下)

今春発売された3作目『天下一の軽口男』は、前作までとはガラリと雰囲気が変わりました。咲くやこの花賞受賞後初の作品が、上方落語の祖・米沢彦八の一代記とは、偶然ですか？

偶然ですね(笑)。その頃は『人魚ノ肉』を出す前で、まだ自分の知識が足りないのが分かっていたので。関西・大阪21世紀協会が募集していた「なにわ大坂をつくった100人」というサイトのボランティアライターを見つけて、応募しました。逆に、タダで大阪のすごい人100人も教えてもらえるんやと思って(笑)。そこで「木下くん、米沢彦八やるか」といわれ、なんか分からんけど「やります」と。



偶然の出会いだったんですね。

でも調べ始めると面白くて。僕が読んだ本によると、土農工商の時代に大阪の生國魂神社で「大名ものまね」をしていて、捕らえようとした役人も笑ってしまい、ばつが悪くて逮捕できなかった、とあって。それを読んで、すごく書きたくなった。絶対的強者である大名を笑い者にする、こんなばかな人間がいるなんてと。あとは、名古屋で死んだこと以外、資料が残っていなかった。そういう空白がいっぱいある人の方が燃えますよね、自分で創作できるので。

もともと、落語やお笑いへの興味はあったのですか。

じつは進路に迷っていた高校生のとき、ちょっとだけ落語家や漫才師になろうかと真剣に考えた時期がありました。当時、両親が大阪で町工場をやっていて、どうやら設備投資などで支払いがかさんで、借金が多そうだと。そこで、借金を生まない仕事はないかと考えたときに、落語家や漫才師はロー本でできるし、同時にすごくクリエイティブな仕事やなと思って。その頃は、中田カウス・ボタンさんが好きでね。自分やったらこんな漫才するのかな、ネタにも満たないようなことを考えたり。ただ僕はあがり症で、文章以外で人を笑わせたことがなかったので、ダメでした(笑)。

(笑)。小説の作風は作品ごとに異なりますが、共通するテーマはあったりしますか。

今日、たまたま中場利一さんという岸和田の作家さんと会ってきたんですが。中場さんが、

「関西の文化は勝ちにこだわらない。負けてからどう立ち上がるかが一番大切で、そこで男の価値が決まる」と話されていて、確かにそうだなと。僕も敗者とか、負けた人を取り上げることが多い。宇喜多直家も敗者、新選組も結局は負ける人たちですからね。しかも、悪の美学を書けたらな、という思いもあったので。単純な勝者を書かない。米沢彦八も最後だけを考えたら勝ち組ではないけど、誇り高い負け組というかね。それぞれ書いてるときは意識してませんでしたけど、そういう共通する部分はありますね。

今後、書いてみたい題材はありますか。ご実家が町工場を経営されていたこともあり、「いつかは職人の話を書いてみたい」というお話もよくされていますね。

職人の話は書きたいですね。今はもうやってませんが、実家はベルトコンベアーを作る工場でした。あれって、だいたい5ブロックぐらいのパーツからなってるんですよ。それをひとつずつ工場で作ってね。僕も学生時代にバイトとして入ってたんで、納品先で据え付け作業まで手伝ってました。プリン、飴ちゃん、ハム、自動車、お酒、色んなメーカーさんがありましたよ。牛乳会社とかは、翌朝には機械が動いてないとダメなので、夜通しやって。夜中2、3時になっても、例えば1列から5列への仕分けが上手くいかないとか、意外と大変で。そういうとき僕は何もできないので、黙って親父やベテラン職人が微調整しているのを見てるだけ。どうすれば上手くいくのかなんて、言葉では説明できない領域ですよ。上手くいくと職人さんたちは「牛乳の機嫌が良かったんやろ」とか言ってました(笑)。

まさに、職人の技と経験が活きてくるん場面ですね。もうアイデアが膨らんでいるのでは？



いやー、町工場をそのまま主題としては書けないですね、近すぎて。結局僕は途中でドロップアウトという
か、バイトでしかやってないんで。究極的には分からない部分もありますね。ただ、母親の実家も工場でし
たし、やっぱり職人に教えてもらったことや、ちょっとしたやり取りは自分の中に入ってるような気がしてるの
で。鎮魂歌というか讃歌、大阪魂は書きたいですね。

書くことが、違う形での親孝行になりそうですね。さて、9月には光文社から新刊『戦国 24 時 さいごの刻』
が発売されました。6つの短編集で、それぞれ主人公の人生最後の1日を書いたものとか。

最初が豊臣秀頼、次に伊達政宗、今川義元、山本勘助、足利義輝、最後は徳川家康。連作短編なので、
最後まで読んでいただくと「あ！」となる仕掛けです(笑)。死ぬまでの1日を描いたのは、『人魚ノ肉』で竜
馬の話を書いているときに、史実を知っている人は、竜馬が死ぬと思っているところで竜馬が人魚の肉を
食べたことを告白するので、そのシチュエーションがすごく楽しくて。結末が分かっているというのが、すご
いアドバンテージなんじゃないかと思って。秀頼やったら、大阪城が落城するまであと何時間とか。全部そ
ういう風にカウントダウンしています。この”実験”は成功はしたかなと、勝手に思ってるんですけどね
(笑)。

徳川家康は”遺品の〇〇”とのエピソードだそうです。詳しくは本書をご覧ください(笑)。最後にな
りましたが、11月の講演はどんな内容をお考えですか。

『天下一の軽口男』の話をしようと思います。生國魂神社で毎年開催される「彦八はちまつり」は知ってい
ても、彦八本人を知らない人は、意外と落語家さんの中にも多いので。米沢彦八ってこんな人ですよ。こん
な大阪スピリットを持っているんですよ、ということをお伝えできたらなと思います。



★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】

……ライター時代に取材した店で、大阪千日前の肉吸い（肉うどんからうどんを抜いたスープ）屋の店主の話が面白くて。大阪はたこ焼きが名物っていうけど道頓堀にたこ泳いでるか？ てっさが名物やけど道頓堀にフグおるか？ 他のところは、その土地のものを名物にしてるけど、大阪は違う。大阪が言う名物は「加工する技術」やねんと。それも職人の話に通じるんですけど、技こそが大阪魂であり名物なんかなと、ちょっと思いましたね。法善寺横町の割烹では、サラダに自家製のマヨネーズが付いてきて。聞けば、同じエリアで頑張ってた洋食屋さんのレシピを受け継いだものだと。技を残しておきたい思いが、鎮魂歌みたいやなと。僕らが普通に入れる店で、ストーリーまで味わえるのが大阪らしくて良いところ。技と心意気と人情と、浪花節ですよ大阪は！